

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第544号 平成25年5月17日

コンパクトシティ

夕張市の鈴木市長が、世界の「ヤング・グローバル・リーダーズ」に選ばれました。

選んだのは「世界経済フォーラム」で、去る3月12日、2013年度の「ヤング・グローバル・リーダーズ」を発表したもので、日本人としては鈴木市長の他に5人が受賞しています。

「世界経済フォーラム」というのは、スイスの経済学者クラウス・シュワブ氏によって設立されたもので、政治や経済、科学技術など社会の様々な分野で活躍するリーダー達が連携しながら、世界情勢の改善に取り組もうという国際機関ですが、夕張市という斜陽の街のリーダーに着目したことは流石だと思います。

鈴木市長は、東京都の職員という安定した立場を捨てて財政破綻した夕張市の再建のために粉骨砕身の努力をされています。若いのに良くやるなという思いと、若いから出来るのかも知れないという思いが同居していますが、彼の奮闘に対して心から敬服すると共に、応援したいと思っています。

夕張市が何故財政破綻したのかについては色々な原因が考えられますが、国の石炭政策の大転換が大きかった事はいふまでもありません。

そうはいっても、「夕張市の財政破綻の原因を調べてゆけばゆくほど、自治体に共通な要素、役人仕事のいい加減さと無能さと無責任さが判然としてくる（鷲田小彌太著「夕張問題」から）」という行政に対する手厳しい評価があるように、例え石炭が無くなっても財政破綻を避けて生きて行く道があったはずであり、当時の市長をはじめとするリーダーの責任は大きかったと思います。

この先人が残したつけを解消し、疲弊した夕張市の再生のために鈴木直道という若いリーダーが立ち上がりました。

夕張市は、かつて炭鉱で栄え昭和60年代には人口12万人を数えました。それが今や1万人、しかも、65歳以上が45%を超える超高齢社会となっています。

担税能力の高い人たちが激減する中、膨大な借金を返済して行くのは至難の業です。一方、高齢者が多い上に、市民が市内各所に散在して暮らしているという、人口の割には大変非効率で高コストな市政運営を強いられています。

夕張市は、まさに二重苦、三重苦の状態に置かれているといっても過言ではありません。

ませんが、こうした夕張市を立て直すために鈴木市長が取り組んでいる様々な政策の中で「コンパクトシティ構想」がります。

「コンパクトシティ」とは、一般に「生活に必要な諸機能が近接した効率的で持続可能な都市」をいいますが、こうした構想が議論されるようになった背景としては、全国各地で中心市街地の空洞化が顕著になった事が大きいと思います。

大店法の改正等によって、大型店舗等が郊外に建てられるようになり、また、住宅地も郊外に広がる中、中心市街地は寂れ、いたるところにシャッター通りが出現する事になりました。この都市の膨張と中心市街地の空洞化は、高度経済成長とモータリゼーションの発達をもたらした、ある意味必然の流れだったといえます。しかし、都市の郊外化による膨張は、道路や上下水道などの公共施設の新たな整備を必要とする一方で、既存の施設の利用度が下がるなど、公共施設の効率性の悪化と大きな財政負担をもたらすと共に、マイカーを持たない高齢者など交通弱者はそうした都市の発展から取り残され、不便な生活を余儀なくされるに至っています。

こうした状況の中で、中心市街地の再生、再活性化を視野に政策として打ち出されて来たのが、前段述べた「コンパクトシティ構想」といえます。

夕張市は、世帯数が約570に対して約4000戸といわれる公営住宅が存在します。今後、この多すぎる公営住宅を再編して行かなければなりません、鈴木市長は、むしろこれを奇貨として「コンパクトシティ構想」を推進しようとしています。

公営住宅の再編に合わせて、幾つかのブロックに高齢者や若い世代の市民が集まって新しい生活の場としてのコミュニティを作っていく、それが鈴木市長の狙いなのだと思います。

勿論、「コンパクトシティ」も良いことづくめではありません。何ととっても、今住んでいる場所や家から離れて新しい生活をスタートさせることは、誰にとっても大変な事です。住み慣れた我が家から離れるのはつらい事ですし、年を取ってから新たな人間関係を作る事も容易ではありません。ですから、「コンパクトシティ構想」実現の一番大きなネックは、市民の理解と協力が得られるかという事です。

夕張市が、「コンパクトシティ」として再生できるかどうか、鈴木市長の手腕が問われている事は事実ですが、同時に、夕張市民もまた、当事者として夕張市の再生にどう係わっていくかが問われているのだと思います。(塾頭：吉田 洋一)